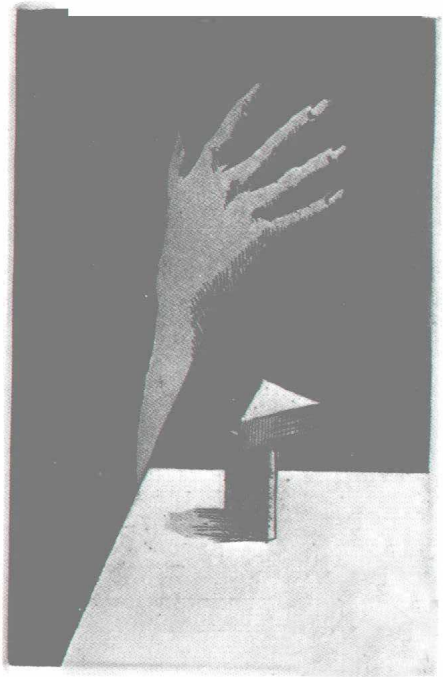
没落風景



没落風景

高橋たか子

河出書房新社

河出書房 書き下ろし長篇小説

没落風景

昭和四十九年四月二十日　初版発行
昭和四十九年九月二十日　再版発行

定価は函・帯に表示してあります

著者　高橋たか子
発行者　中島隆之
印刷者　中内佐光
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の六
電話 東京（292）三七一一番（代表）
振替 東京 一〇八〇二番

（乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします。）

印刷・暁印刷　製本・大口製本
©1974 Takako Takahashi Printed in Japan

没落風景

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

何とて我は胎より死て出ざりしや
何とて胎より出し時に気息たえざりしや
——旧約ヨブ記

第一章

池は草いろに濁っていた。濁りながらも水面だけがガラスのように輝やいている。

山ノ内真子は立ち止り、なにげなく池のなかを覗いてみた。眩しい光の反映が顔を打った。むうんと熱をおびた水の匂いがのぼってくる。池の底には風景が沈んでいた。古い祠、崩れかけた石燈籠、霊場めぐりの札所の屋根、ながながと伸びている何本もの赤松、その繊細な梢、そして白く燃えたつ夏の空。陽の当ったところだけが、水中できらきらしている。その風景は、実際のものより妙に停止してみえ、深く、遙かで、果てしなく続く奥行が感じられる。

すこし軀を乗りだしてみた。表情のない青い女の顔がうつった。沈んだ風景とくらべて、それだけが現実的なものにみえた。厭な気がして、眼をそらせた。二、三歩後ずさりして、頭を左右に強く振った。誰も見ている人はいなかった。静まりかえった山裾である。池に注ぎこむ

山水の音が、どこか木陰でちろちろとしているばかりだった。

今日もまた、当てもない散歩である。真夏の午後の、いちばん暑い盛りに、日傘もささずに歩きまわる。毎日毎日それを繰返している。山の裾にひろがる古い住宅街をぐるぐる歩き、時折この池のところまで足をのばす。ここは気に入っていた。暑くるしい、重たい空気のなかに、草木と土と石ばかりがのさばっていて、人気は全くなかったからである。

――さん。

真子は振りかえった。あまり静かなので、誰かが自分を呼んでいるような気がする。炎天下に、山の気配がひしと迫ってくる他、何もない。いや、そうではない。先程の電話のことが、真子の頭にひっかかっているのである。

散歩の途中で、真子はふいに水が飲みたくなったのだ。家までは遠くないが、帰りたくなかった。時折コーヒーを飲みに入る喫茶店へ行くことにした。古い住宅街をつらぬいて走っている街道は、最近舗装され、バスやタクシーがこんな郊外へも入ってくるようになった。舗装道路に面して、二つ三つ喫茶店もできてきた。それらは去年あたりから出まわりはじめたプレハブである。戦前からの古く典雅な家々のなかに、取ってつけたように置かれた、まあたらしく安っぽい喫茶店の建物を、真子は好まない。

横道の奥のところに、行き馴れた喫茶店はあった。それはプレハブではない。真子は店内をまっすぐに進んでいき、いつもの席に腰掛けた。コール・コーヒーを注文すると、窓枠に寄り

かかるふうにして外に眼をやった。そこは崖になっていて、桜の古木が崖ぶちに十何本も並んでいる。その下が郊外電車の線路だった。昔ながらの単線で、十五分置きにしか電車が通らない。線路のむこうは、ずっと低い街並が、暑気のせいか白いもやのようなもののなかで霞んでいた。室内でロカビリーが鳴りだした。真子は不愉快になった。その気分をじっと抑えていると、窓ガラスの外に、赤錆いろの電車がのぼってきた。傾斜が急なので、喘ぎ喘ぎ、ゆっくり迫りあがってくる。電車の前面は大きな顔のようだ。赤錆いろの顔のなかで、ガラスの眼玉がかっと見ひらかれている。ぐんぐん膨らんで、窓のところに近づいてくる。音は聞えなかった。

「――さん、お電話がかかっていますよ」と給仕が呼んだ。

真子は反射的に立ち上った。いったいどういうことだろう。自分が時折ここに坐っていることを知っている人がいるなんて。せっかく一人でひっそりしているというのに、そんな自分を見ている人がいるなんて。

「もしもし」と、受話器をつかんで言った。

相手の応答はない。わざと引き伸ばしたような沈黙があり、やがてカチリと音がして、相手は電話を切った。

コール・コーヒーを飲みたいという気持はなくなっていた。真子はそのまま金をはらって外へ出たのである。

真子は草いろに濁った池にぼんやり視線をむけながら、変な電話だ、と、小さく声にだして

言った。誰も聞いている人はいない。

所在ないままに、いつものように池のまわりを歩きだした。中の島まで一度入ってみようと思いながら果さないままだった。すこし彎曲した土橋がなかば崩れていたからである。池のまわりは人が歩く幅だけ、土がむきだしになって踏み固められている。両わきには熊笹やすすきや雑草が茂っている。

何も考えたくないので歩く。だが暑気のなかを歩いていると、何も考えたくないという意識までが、ぼうっと蒸発してしまいそうだ。

やっと家にむかう方向をとる。住宅街の道は地面が白く灼けている。それは山裾の線に沿った後、左に折れ、それからすこし下り勾配になって南に伸びている。両がわに古い大きな家がつらなっていた。それらはすべて夏の午後の白光のなかで、物憂くまどろんでいた。真子は左に右にと眼をむけながら、一軒一軒の表札を読みとって行く。歩き馴れた道だが、よくそんな歩きかたをしてしまう。別に関心があるわけでもない。岩田、正岡……関心があるわけではないので、それらはたちまち頭を通りぬけていく。結城、永田……一軒と一軒との間は長い。だから眼が疲れることはない。藤川、久里原……そしてすこし松林がある。山ノ内、大場……真子は立ち止った。見馴れた大場家の門に気づいたからだ。それから後もどりした。山ノ内と厳めしく書かれている表札を読みとりながら、自分の家と気づかずに通りすぎてしまったのだ。

大きな構えの正門の扉は、木肌が白っぽくささくれだって、ところどころで虫の喰った跡が

ぼろぼろになっている。何カ月も閉めきったままだった。真子は土塀に沿って、さらに後もどりしていき、通用口のくぐり戸をあけた。右手には竹の植込みがあり、そのまばらな葉をとおして、玄関の側面が見える。その白い壁面を、傾いた陽があかあかと照らしだしていた。壁にくりぬかれた、覗き見のための丸い格子窓がある。その中から誰かがじいっとこちらを窺っているような気がし、真子はそこへむけて強い視線をむけた。気のせいだと自分に言いきかせる。

細い石畳をたどっていく。鮮やかな紫の縞のある蜥蜴が、てらりと光って、すばやく石畳をよこぎった。家はこの住宅街の他の家と同じように、ひっそり静まりかえっている。そっと溜息を洩らしても、たちまちまわりに伝わって聞えてしまうほどなのだ。うっかり溜息ひとつ洩らせまいと真子は思う。

勝手口から上り、廊下へ出る。そこで、真子の足はためらう。空間をへだてて、足音に聞き耳をたてている人を思うからだ。家のなかがふいに緻密なものに感じられた。外に出ると稀薄なものになる自分の周囲は、家に入った途端、息ぐるしいものに変わる。

真子はなるたけ足音をたてないようにしながら、廊下を歩きだした。それは回廊になっていて、南の庭のほうへ回ると、大きい客間、小さい客間、茶の間と並んでいる。真子の部屋はさらに廊下を曲った、東の端に位置していた。

茶の間から廊下へ煙草の煙が濃く漂いでている。北の廊下から自分の部屋に行けばよかったと思ったが、もう引き返すわけにはいかなかった。

「毎日どこへ出かけるの？」
はたして姉の声が伸びてきた。
「知ってるくせに、訊ねることはないでしょ」
真子は茶の間の前で、顔を硬わばらせて立ち止った。
「私が知ってる？　あんたに関心をもってる？」
嘲笑うような響きが姉の声にこもる。畳の上に仰臥けになって、天井を見あげながら煙草をふかしている姉を、真子は横眼で睨んだ。
「お姉さんはそういう人」
早く立ち去りたいが、そうはできないものが、姉にかかわり合うといつも真子のなかに生じてくる。
「お嬢さまは御散歩にお出かけになりました。昨日も御散歩でした。一昨日も一昨々日も。これはねえやの言葉よ」
姉はゆっくり起きあがった。パーマをかけない長い髪が肩の上で乱れているのを、右手で後に掻きあげる仕種をした。
「出かけるのは私の勝手だわ」
「暑いのにね」
「家のなかだってたいして変わらない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あんたの部屋は午後になると、陰になって涼しいはずよ」
姉がどこまでも押してくると、真子はいつも言い詰ってしまう。
「もう結構。ほんとにうるさいわ」
真子はそう言って、通りすぎようとした。
「ちょいと、真子さん」
姉が強く言って、立ち上ってきた。敷居のところで、すっくと立つ。ひどく細くて、真子よりすこし背が高い。指先で煙草がくすぶっていた。血の気のない顔の中心に、大きな眼が底ぐろく赫やいている。いかにも顔の中心という感じがするほど、独得な眼差を、姉はいつも向けてくるのである。その鉱石のような眼光のそばにあっては、眉も鼻も口も髪も、ほとんど稀薄なものになってしまうほどだった。
「こんな広い家で、脳貧血が起った時のことを考えてみられる？　眼の前がまっくらになって、呼んでも誰もこず」
姉は凝視をむけたまま言った。
「毎度のことね」
真子はそっけなく言った。この夏になってから姉はしきりに脳貧血を訴えるようになっていた。だが姉が実際に昏倒したのを真子は見たことがない。大体、昔から姉は自分のことになると芝居がかるので、誰も本気にとれなくなるのだ。

「電話をかけようと思って、階段を後むきに這いながら降りてきたの。そのままずっと茶の間に寝てるのよ」
姉は大げさに息を吐く仕種をした。
「誰に電話を？」
真子はそう言い、先刻のあの変な電話のことを思い出した。誰も知っているはずのない場所にいる自分のところへ、電話がかかってきたことを不可解に思い、だが、それは姉に間違いないと思ったのだった。真子の居所を詮索する人は、姉をおいて他にはない。
「さっきの電話、そのことだったのね」
真子はそれなら理由がわかったと思い、すこしほっとした。
「電話？」
姉は甲高い声で言い、脳貧血を訴えていた状態からふいに生気をとりもどした顔になった。あらわな好奇心でいきいきしはじめる。真子はしまったと思ったがもう遅い。
「私があんたに電話？」
ふたたび嘲笑うような響きが声に出てきた。
「大したことでもないわ」
真子はそう言い捨て、廊下を歩きだした。背後で姉の笑い声があがった。
「おかしいこと。私が真子さんに電話したって？　私があんたにどんな用があるって？　私が

あんたに打ち明けたいことでもあるって？」

真子はそれ以上かかわり合わずに歩いていく。突き当りが階段の裏の三角形の空間になっていて、そこに造られた飾り棚に、受話器がひっそり載っている。そのむこうの窓の外に、おしろい草の細かい花が咲き乱れていた。ひまわりが何本も不規則に立っていて、その黄色い大きな花は、疲れた顔のようにうなだれていた。姉が気紛れに種をまいておきながら、手入れをしないので、花畠は荒れ放題になっている。

廊下を曲って、自分の部屋に入った。薄暗く、黴の匂いがする。東がわと北がわしか窓がないので、あまり陽が射しこまない。建物の構造からして南がわに縁を造れないわけではないのだが、曽祖母が明るい部屋は嫌いだと言って、自分の部屋をわざとこんなふうに造らせたのだということだった。家のなかの数多い部屋のなかからその部屋を私室としてえらんだ真子の好みを、姉は変わっていると言う。だが真子は真子で、家じゅうでいちばん明るい、二階の西南端の部屋を、私室としてえらんだ姉の好みも、また変わっていると思う。朝寝坊をする姉には、朝日の射さないことがいいのだろう。だが、二階のその部屋は、昼間は空からぎらぎらした光が雪崩れこんでくるようで、いつも自分が晒されている感じがするだろう。そんなむきだしの光に拮抗するには、鈍感であるか残酷でなければならないだろう。

真子は座蒲団の上に坐りこんだ。仄暗い空気のなかで、じいっと蹲る。娘らしい装飾のない、まるで男の学生の下宿部屋のような部屋だが、ここが家のなかでいちばん安心できる場所だっ

た。避難所だと思い、その想いにむけて真子は長い息を吐いた。

電話の件を思わず姉に口走ってしまったのは失策だった。大体、あれが姉であったはずがない。すくなくとも姉であったという根拠は何もないのだ。よく考えてみれば、給仕が「――さん」と呼んだのを、「山ノ内さん」と反射的に思い込んでしまったのだろう。相手が電話を切ったのも偶然だろう。とはいっても、では、なぜ、自分が呼ばれていると思い込んだのか。しかもそれが姉だと決めてしまったのか。そう考えだすと、やはりあれが姉であったと思うことは、理不尽ではないようでもある。

裏庭のほうで、ぎいっぎいっと車輪の軋み音がしていた。足の立たない祖母が車椅子に乗って、女中とともに裏庭を横切っていく音である。それが暫く続いて、止む。祖母は一日に一回、離れから出て、夏なら銀杏の木の陰、冬なら陽の当たる草むらで、僅かの時間をすごすのだ。車輪の軋み音が止むと、ふたたび静寂が濃くひろがった。

人がいるのに無人のような家、さっぱりと無人ならいいのに、そうではなくて、この家の住人がそれぞれの私室で吐きだす、白い濁った息が、重たく澱んでいる。いくつかの私室は、そんな吐息で一杯になってしまう。だが廊下に面したどの戸も硬く閉められているので、たがいに知ることもない。

先刻の散歩の途中の場面がなんということもなく思い出されてきた。住宅街のはずれにある高校の運動場のそばを通りかかった時、ユニフォーム姿の女生徒の一団が、爆笑しながら門か

ら出てきた。その声と、その熱気と、蒸せかえるような体臭とに、真子は圧倒されそうになって、その場に足を止めた。彼女らの頬や腕や太腿の肉が、熟した柿のようなあかあかした色合いで、動きとともに揺れていた。全員はいつまでも笑い続けている。何が可笑しいのだろう。理由もなくて、彼女らは笑っているふうだった。命が笑いとなって噴き出ているのだ。その一団が大きな陽炎に包まれているかのように、真子は眩しく眺めていた。自分が長いあいだ笑ったことのないのに気がついた。自分もあのような時代があっただろうかと思い返した。だが真子は生れて二十四年間というもの、ずっと陰のなかばかりを、一人でひっそり歩いてきたような気がする。

そのことを一度じっくり考えてみなければならない。だが考えようとすると、いいようのない疲労が自分の中から立ちのぼってくる。何事もどうでもいいのだと思えてきた。

ふたたび車椅子の軋み音がしている。祖母が一オクターヴ高い、上ずった声で、女中に何かを言いつけている。女中が台所のほうへ駆けつけていく、草を踏むサンダルの音がする。暫くして戻ってくる。それから車椅子が離れのほうへ、ぎいっぎいっと動いていく。

真子は頬にかゆみを覚えたので、壁に貼りつけられた鏡のなかを覗きこんだ。毎日の散歩でひどく汗をかくせいか、小さな吹出物ができていた。軟膏を抽出から取りだし、指先で丹念に擦りつけた。機械的に何度も指をうごかしていた。

ふと真子は、鏡の奥に、姉の姿が見えたのでどきっとした。よく見ると、閉めるのを忘れて

いた入口が映っていて、姉が敷居のところに立っているのであった。近づいてくる足音はすこしも聞えなかった。

「鏡はいいものね。あんたはまだ若いんだから」

姉は真子が振りむくと、そう言った。姉の推測することとは全く別な目的でたまたま鏡を覗きこんでいた自分の立場を、真子はいまいましく思った。

「鏡の中にはいいものが映るでしょ」

姉は続けた。

「疲れきった顔。きれいなお姉さんには及びもつかない顔。こう言えば、御満足？」

真子は姉を強く見て言った。いくら強く見ても姉の視線にはかなわない。眼が大きい上に、まるで見えないものを見透すような眼附きをするからである。だが姉はその視線を、ふうっと微笑のようにやわらげた。

「ああら、女はね、鏡に顔を映すたびに、すこしずつきれいになっていくものよ」

「そんな実験は自分でするといいわ。私にはどうでもいいの」

真子は姉の横をすりぬけて、部屋の外へ出ようとした。

「どこへ行くの？」

「どこへも行きやしないわ」

何処に行くところがあろう。することもないので暑い戸外を歩きまわり、疲れきって自分の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com